

「国境超え、世界市民意識築けるか」

サンデル教授、震災を語る

東日本大震災後の世界のあり方をめぐって、対話型講座「正義」のテレビ放送や著書が爆発的人気となった米ハーバード大学のマイケル・サンデル教授(58)が22日、同大の学生主催のシンポジウムで、参加者と議論を交わした。



震災で生まれた日本への共感、国境や文化を超えた共同体意識が芽生えるきっかけになる——そう訴えた教授に、参加者はそれぞれ

「世界市民」という考えに感動した」という女性には、自分の支持する政治哲学は「論理と理性」と「共感的理解」を分けるものではなく、双方を含んだものと説明。世界中の人々が共同体の意識を深めるための議論も、感情や情熱と理性を切り離す必要はなく、むしろそれらを反映しながら、公の場で堂々と議論す

「世界市民意識の発展の可能性にも疑問を呈した。『災害は災害』と切り出したサンデル教授は、「ただ、それぞれの災害からどういう意味を見いだすかについて、私たちはまだ答えを出せていない。どれだけ

「世界市民」という考えに感動した」という女性には、自分の支持する政治哲学は「論理と理性」と「共感的理解」を分けるものではなく、双方を含んだものと説明。世界中の人々が共同体の意識を深めるための議論も、感情や情熱と理性を切り離す必要はなく、むしろそれらを反映しながら、公の場で堂々と議論す

「世界市民意識の発展の可能性にも疑問を呈した。『災害は災害』と切り出したサンデル教授は、「ただ、それぞれの災害からどういう意味を見いだすかについて、私たちはまだ答えを出せていない。どれだけ

「世界市民」という考えに感動した」という女性には、自分の支持する政治哲学は「論理と理性」と「共感的理解」を分けるものではなく、双方を含んだものと説明。世界中の人々が共同体の意識を深めるための議論も、感情や情熱と理性を切り離す必要はなく、むしろそれらを反映しながら、公の場で堂々と議論す

「世界市民意識の発展の可能性にも疑問を呈した。『災害は災害』と切り出したサンデル教授は、「ただ、それぞれの災害からどういう意味を見いだすかについて、私たちはまだ答えを出せていない。どれだけ



「原発議論 避けないで」

サンデル教授の講演後、春日写すのはシンポジウムの後、朝日新聞などの取材に応じた。主なやりとりは次の通り。

——福島第一原発の問題をどう見ているか。

危機が起きる前、米国は原発推進に向かっていたが、再考を迫られた。他のすべての国も、エネルギー政策の安全性やリスクを新たな枠組みで議論することが避けられないだろう。

だが、根本的には、膨大なエネルギー消費に依存する物質的に豊かな

「途上国援助で役割を」

生活様式をどうするか、我々がどんな社会に住みたいかという価値観の問題になる。

——日本での原発の賛否をめぐるとい。

私のアドバイスは、思慮深く、丁寧な議論をすること。絶対に議論を避けてはならない。社会が直面する最も困難な課題について、賛否両派が相互に敬意を持って、公然と討議できれば、民主主義は深まる。だからこそ、建設的に議論するための枠組みの設定が非常に重要となってくる。

——誰が枠組み設定を担うべきか。

政治指導者に責任があるが、しばしば機能しない。有権者が望まないからだ。民主主義に不可欠な、自ら考えて議論する市民を育む教育の責任が大きい。メディアも意味ある議論を提起する義務がある。

——日本政府は11年度予算の途上国援助(ODA)削減を決めた。日本が震災後の緊急事態を過ぎた時、途上国援助で再び寛大な役割を担うことに、私は疑念がない。